
脳内義姉妹

気晴らし作品投稿者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脳内義姉妹

【Zマーク】

Z2285P

【作者名】

気晴らし作品投稿者

【あらすじ】

「ごく普通の学校に通う清葵には皆に言えない秘密があった。それは一部業界では有名な、声優水青あをいであることが。彼の不幸を面白おかしく、また涙なくしては語れない（笑い泣）ような毎日をまとめた物語。

果たして彼は苦悩な日々から解放される日は来るのだろうか（作者としては不幸のどん底に落とす予定）

「義姉妹」は「キヨウダイ」と、「葵」は

「ソラ」と呼びます。

第1話 同学年（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

第1話 同学年

「おい、眠そそうだな・・・まさかお前やったのか?!」

「昨日放課後、制服を着替えて店に予約していた物を取りに行って、即仮眠を取つたと言つても3時間くらい、色々あつてやつと親が寝たのを確認してプレイしたが、いつの間にか朝日が昇つてたぜ」

そんな話し声が耳に聞こえ、バイト先の同僚にその気になれば男共を膝まづかせるという釣り目を、やうに吊り上げる。

「おお～～～勇者だ！勇者がいる。で？どうだつたんだ？」

「流石は脳内義姉妹の作品。今回作はノベルだつたのでそれなりと進んだ。1キャラクリアしたつて所だな」

「だれだ？誰をクリアしたんだ？」

「南条雲。なかなか伏線もイベントもちゃんとあつてなかなかよかつた」

「な～んだよ、あの図書委員かよ、そんなのよりメインヒロインだろ、メ・イン・ヒ・ロ・イ・ン」

嫌な話しながら気になつてしまつ。だが一人の会話は最悪の方向に進むのであつた。

「バカ野郎、メインヒロインは最後に攻略するのが当たり前だろ。ま～気持ちはわからないでもない」

「だろだろ？」

「体験版でもいいキャラだつたが共通ルートで中島飛鳥、彼女の声を聞くたび何度も攻略順を変えよつかと思つたか」

「さすが水青あをいちゃん」

「ばか野郎、様だ！、あをい様さまと呼べ！～」

ドン、と机に顔面をダイブさせた清葵の音が教室に響いたのであつた。

「ん？大丈夫か、葵」

「あ、あ～。大丈夫」

肩よりも長い邪魔な髪の毛を避けながら、机から声をかけてきた一人に顔を向ける。

予想外ながら、二人の会話を止める事ができたらしい。

「あ、そういえばお前の母親、ゲーム会社の社員じゃなかつたか？」
いや、最悪の方に話がスイッチしたのであつた。

「お？ そうなのか？ なら同じゲーム会社つながりで色々聞けたりできなかつた？ たとえば脳内姉妹とかの話とか」

・・・・・

「バカかお前たちは！！ エロゲー会社じゃね～か、そんなの母親に聞けるわけ、聞けるわけ・・・・・」

「・・・聞けるわないじゃない！！！」

「はい、カット。あをいちやんありがと～。10分休憩ね～」

「か～さん！！ 僕をあをいつて呼ぶな～！」

「社長と呼びなさい、このバカ。一応口は収録現場なのよ？ 間違つて収録した声がゲームになつたら困るから声優名で呼んでるんじやない。今日は特に機嫌が悪いわね・・・」

そんな会話が今日も脳内姉妹の収録現場で木魂するのであつた。

第1話 同学年（後書き）

まずははずいぶん間が開いてしまった事をお詫びします。

また本来投稿する予定だった短編を書かずこちらの投稿になつたの、この作品でリハビリをしてから書き直そうと思つたからです。短編の投稿はまだ先になりそうです。

さて堅苦しい話はおいといて、今回の作品はどうだったでしょうか？え？短い？すみません、なかなか長文は苦手なので・・・。また今回はなるべく日を置かないで書いていこうとの思いもあって短いです。（ムリだと思つけど）

感想なども待つてます。誤字などの指摘でもけつこうです。

また前作書いてストーリー的に途中で書き直したいなど思つたところもありましたが、そのままにしてました。

ですが今作はどんどん書き直しちゃう予定です。すみません。

この話もも暖かい目で見てくれる人が多くいるよう期待しながら今回はじまります。よろしくお願ひします。

第2話 声優観察（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

「ねね、今ちやんと『I』の部分脳内変換で『娘』になつた?」

ええなりましたよ

やられそんな落ち込まないで
落ち込んでいた俺を慰めてくれる。
碌な男の如き
ないわよ」

「だつてどちらかと言えば美人の方よね、女装すると」

同僚に、落として上げて落とすというひどい極までの方法でいじめられ

れ、勝を一いつて落せ込んでいた備は、涙ながらに抗議をする。

止
め
な
い
で

どこからともなく現れた母さんに羽交い絞めにされる南さん。

危険を察知して逃げようとしていたが、止めに入つてくれたので緊張を解くのであつた。

（逃げるといつても縋り付いていた体勢からだったので上半身を反対側に倒しただけ、足はそのままくの字に残してあり、逃げるときに発した悲鳴は「うわ」などではなく「キヤ」の類の事だつたなど、ある種の職病かもしけない）

「ほら休憩終わりよ、次の収録始めるわよ。
から全部終わるまで休憩なくていいわね」
南さんは元気みたいだ

「やあつとまつて、社長……」

想定外の邪魔、および妨害をされ全力で抗議する南さん、先ほどの
ようにちょっと問題のある正確だが、前作では真面目系図書委員を
やるなど、七色の声といわれる有名声優であり、今作では1ヒロイ
ンのほかに3キャラの端役の声もやるなどかなりの量で、それを休

懇無しとは死刑宣告とも言えよ。」

詰まるところ、母さんが言いたいのは「うちの息子ムスメに手を出す奴は許さない」って事である。

「助かりました・・・でも社長こんな問題が起こるなら、声優辞めれば全部丸く収まるのでは」というか辞めさせる

「そんな事を言わないであをいちゃん、貴方が初めて出た次の作品から戻つてくるまでの暗黒期、あんな首をつる寸前まで行きたくなのよ。声優の人たちだけじゃない、シナリオもシステムも、CG、BGM、ムービー、その他もうろの関係各所が『あをいちゃんでないならやる気出ない』って言つていいい作品ができるのよ!」「プロなら声優一人でそんなに品質落とさないで下さい、せめてある程度のところで納めてくださいよ」

確かに暗黒期の作品はひどかった。

声はほとんど棒読み、シナリオは起承転結?何それ?、いたるところでバグが存在し、CG?白黒?、BGMというよりシステム音のループ、ムービー・・・動きませんでしたetcetc・・・

「プロがどんな状態でもある程度の作品を作れる人というなら、私たちは最高の作品を求めるアマでいいわ!!」

「社長としてはいいセリフかも知れませんが、親としては完全失格ですかね」

「いいのよ私は、反面教師を目指してるから。そんな事より収録押してるのだから早く早く」

そういうながら俺を引っ張つて行く社長兼母親であった。

第2話 声優観察（後書き）

はい、早め更新です。

こんな短いなら、まとめて一話にしちゃなんていわないで下さい。短い方が気が楽にかけるんですよ。

ところで、まだ危ないシーンとかないですがどんな描写が18禁なんでしょうがね・・・そろそろきわどいシーンが来そうな気がしますが、詳しい方教えてください。

第3話 ハックズクライマー（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

第3話 ハックスクライマー

「ん、んつ、ん～～～～、ふ～～～～」
「ん、んあ、んんんあああ、は～～～～」

「ん、あ、ちよ、ふか、ダメ、ふかああ、イタイイタイイタイイタイイタイ！」

と痛がると押されていた手を離してくれた

「ふ～～～、ちよつと押しすぎですキヤンさん」

「あ～～めん～めん、いやあをいぢやんつて柔らかいからそのままベターフて床まで付いちゃわないかな？つて思つちやつて」

「ま～理想はそこですけど」

「そういいながら前屈姿勢から立つ

「いい声を出すために発声だけじゃなくてストレッチまどとは、声優の力ガミね」

「ん、ど。そうですか？嫌々ではあります、最終的にコレもお金を取りつて販売されるわけですから真面目にやらないと、そついいながらストレッチの時邪魔になる為まとめていた髪をほざくどうも髪が締め付けられる感覚が苦手

「じゃ～腹筋とかも鍛えてたりするの～収録現場ではやらな～けど」「いえ、あの、その・・・・・」

少し俯いてポリポリとちよつとだけ赤くなつた頬をかく仕草に襲いつくなる衝動に駆られたらしげ、今も休み無しで収録している南の顔が浮かびなんとか押し込んだとの事。「どうか身長差考えて、私のほうが低いんだから俯いたらその顔逆に見えやすいのに」など理不尽な事を思われたりした

「そろそろ諦め時なんですが、もうちよつと背がほしいかな～って、筋肉付きすぎると伸びないって言こますし」

「そう？今まで十分じゃない？」

「それって男の娘の身長としてはって思いました？」

近くにおいてあつた自分のカバンをあさりながら問いかける

「あ、わかつた？」

「は～あ、そんな事考える人にはコレは無しかな～？」

そう言いながらカバンから取り出したタッパーを見せ付ける

「そ、それは！葵特製蜂蜜付けセット！！」

予断だが、もし葵のところを、あをいに言い間違えると必ずもられ
ない

「あ～ごめんごめん、誤るから許して～」

「もう現金ですね、はい今日はショウガ漬けです」

「今日はショウガか～個人的にはレモンのほうが好きなんだけどね

」

「レモン漬けは皮が問題であまり作りたくないんですよ」

レモンはほとんどが海外産で輸入のときに大量の農薬をまぶされたりしているらしい

「ま～でも、このショウガ漬け、ん～ん美味しい。ちょっと苦味とかが苦手だつたんだけどコレは大丈夫なのよね、今度レシピ教えてくれない？」

「ん～んあ～・・・すみませんが・・・」

「ダメか～、秘伝のレシピって事なのね？」

「いえ教えてもいいですが・・・たぶん失敗しますよ？」

「ええ？」

「これけつこう隠し味とかのバランスが難しくて、以前知り合いのシェフにも教えたんですが大失敗したとかで・・・」

「シェフでもムリとか・・・確かに私には無理そうね」

ちょっと驚いたが納得つて幹事で頷きながら食べていると

「キヤンさん、次お願ひします」

「あ～ハイハイ

そういうながら濡れティッシュで手を拭きながら休憩室を出て行こ

うとするが扉の前で振り返り

「あ～そうそう、前も言つたと思うけど、学校の体育とかでストレ

ツチする時はなるべく女の子と組むのよ?」

腐った関係はちょっと興味があるけど、襲われるのがあをいちやんなのはダメよね~と本人には聞こえないように言いながら出て行くキヤンさんであった。

第3話 ハックズクライマー（後書き）

あおい あをい に変更

まだ大丈夫、コレはストレッチです。

そういうえば葵の容姿などについてですが、ある程度決まつてはいるんです。

ただ照会文みたく書くのがキレイなので話の流れにそう様な形で書きたいんですが・・・なんかちょっとづつ書かれてくみたいになつてますね・・・。ある程度まとめて表現したいんですが・・・。まゝ容姿の説明しそうって苦情が来たらこの後書きとかで書くかも知れません。

ではまた次回

第4話 世界でいちばんNG（だめ）な愛（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

第4話 世界でいちばんNG（だめ）な愛

「キヤーー、こないで、うかうかしないで~~~~~！」
「はい、カット。え~とと次はどのシーンがいいかしら・・・」
「ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさい社長許して~」
ガラス越しに編集ブースにいる社長に謝る南さん
「いい感じに疲れていますね？」

「あ、あをいちゃん」

編集ブースに来た葵に母さんと南さんが俺のことを呼ぶ
「差し入れです、今日は一口クッキーにしてみました」
おおーと喜びの混じった声が沸きあがる

そんな中

「お願いあをいちゃん、あをいちゃんからも許して貰おうつね願
いして~」

と、南さんが頼み込んできた

「そうですね・・・南さんもだいぶ疲れてるみたいですし・・・次
は疲れてるシーンのどこのやればいいのでは?」

「あをいちゃん」

しおしおと膝から崩れていく南さんがそこそこだったのであつた

「じゃー、50ページあたりのシーン?」

「いえ、そこの疲れてるシーンは喜びも混ざった感じのどこのな
で・・・」

「じゃー無難に15ページのどこの?」

「全力疾走のあとですか、そこの辺じゃないですか?」

「社長とあをいちゃんの、おこ、あくま~」

そんな声が聞こえ田を点にして畳わす俺と母さん

「じゃーその怒りを使って~」

「お供Bの10個目のセリフ、スタート」

「いい加減にしないと、ケツの穴に手を突っ込んで、奥歯ガタガタ

言わすぞ。」

この一人、おにとかあくま以上です。

「お疲れ様です」

そういうながら南さんに蜂蜜ショウガと紅茶を渡す

「ありがとう」

ちなみに紅茶には蜂蜜を混ぜてある

「社長には一応もう酷使しないよつ話つておきましたので、あと少
ちよつとでいいと思つますよ?」

「ほんとうにありがとう、あをにちゃん」

どん底まで落としたのは葵だったことはもひ志れた南さん

「次の収録すぐなので俺はコレで」

そういうながら扉の前まで行くと

「でも俺・・・」

もじもじしながら南さんに背を向けたまま

「がんばってる南さん嫌いじゃないです」

そういう終わるか終わらないかのタイミングで扉から出て行つた。

数秒後「キタ――」という喜びの声が扉の向こう側で聞こえたとか

その声を聞いて子悪魔のような（本人が聞いたら怒ると思つ）顔を

した人がいたとかないとか。

そのあと、がんばってその日だけで自分の収録を8割ほど終わらせて帰り、次の日会社からの電話でほとんど収録終わつてると言う理由で当分来なくていいと連絡があり、葵と会う機会が減らされそのまま枕をぬらしながら不貞寝する南さんであった。

第4話 世界でいちばんZEG（だめ）な愛（後書き）

いつもやって短いペースで書いていくと後書きに書くことが少なくな
りますね・・・

あとサブタイトルを考えるのはちょっと面倒にも感じます・・・
ネタ切れになりそう。

でもいけるところまでがんばる予定です。

そういうえ、前の話であをこの名前を訂正しましたがそっちの方が
声優名っぽいと思つたためですがどうでしょう？

それでは次話をお楽しみに

第5話 車輪の国、向日葵の一品（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。

また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。

ぜつ

たい真似をしないで下さい。

第5話 車輪の国、向日葵の一品

「あ・・・、ん・・・、ああん」
「ちょ・・・あ、う・・・、え・・・。あん」
「そ・・・」・・・、きてる・・・。きて・・・い・・いいいいい・・・」
「はい終り」

「ありがとう母さん」

「そう言いながら、軽くなつた肩と首を動かし、口キ口キとならす。
「でも、その年で肩こりつて・・・」

台所に行く俺に母さんが言つ

「少しでも家事を手伝ってくれれば、こんなにこひなこと黙つだけ
ど」

「そこには反面教師を指してゐるから、母さん」

「そのセリフ2回目、言つてて悲しくならない?」

そういうながらレンジで溶かしてた作り置きの料理を取り出す
(ちなみにこの家では市販のレトルト食品とこう物は冷蔵庫に1品
たりとも存在しない。すべて葵作自家製冷凍食品などである)
「いいじやない、そのおかげで葵は立派な主婦スキルをマスターで
きたんだから」

「その、ふ、の漢字についてはおかずの品数を相談しながらじつく
り話そうか?」

そう言いながら取り出した料理に最後のてまをかける片手間、出汁
が取れたお湯に、具をいれ、味噌を溶かしていく。

「ごめん、許して、母さんも仕事で色々あつてポロッとそんなセリ
フ出ただけだから」

「・・・」

しかたないので冷蔵庫から余つていた、一揚げを出しカリッカリに
焼く事にしてもう一品追加する事にした。

「ツチ、本当に今日は機嫌が悪いわね・・・」

返事をしない」と抗議をするが無視を決め込む。

「「いだきます」」

「そう言つて食べ始めようとすると

「あら母さんだけ一品だけおおい?」

「疲れてるつて言つたから、多くしてみた。そんな事いいからせつさと食べよ?」

「ほんなんので騙されないんだから」

「そう言いながらも料理を食べ始める母さん

そのあとは美味しいと言つながらもくもくと食べるのであった。

「「」馳走様、じゃ俺先に風呂、入つてくるね

「あ、ちょっとまつて」

「母さんはまだゆっくり食べてていいよ」

「え? あーーーのために一品多くしたのねーーー!」

そんな声を無視してさつさと風呂場に逃げ込む。

家の中では家事をする者が強い、それを証明する薬であった。

第5話 車輪の国、向日葵の一品（後編）

ちょっと短かつたかな？

でも「くらいが楽なんですね。

ちなみに更新は、2、3日を目標にしています。

どこまでがんばれるかな・・・

あと投稿時間ですが、前作の時の時間帯に合わせてみる」といってました

第6話 BALDR MAID（バルド メイド）（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。

また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ

たい真似をしないで下さい。

第6話 BALDR MAID (バルド メイド)

「ふ〜〜〜〜〜〜」

湯に体を沈めていきながら一息つく

「さつきは何とか逃げ切ったけど・・・」

さつきもし母さんが疲れてるかつて話の流れになればそこからなし崩し的にお願いをされるのがわかつてたので逃げていたのである。

「でも、今日はしつこかったし・・・次がありそう」

いつもはココまでしつこくない。

たいていは葵じしんが察して早めに折れるか、ある程度のところでは母が諦める。

が、今日は学校での事が引っかかっていて微妙に素直になれない葵と、割と切羽詰つてゐる母とが重なつたらしい。

「どんな手でくるかな?」

そんな事を思いながら湯船から上がり贅肉無し、筋肉目立たない、とこう白い肌を洗い始めるのであつた。

「さてと」

そう言いながら風呂場から出ようと扉を半分ほど開けたあたりで目の前に光る物を見た。

「強硬手段できたか・・・また鍵付け替えないと」

そういうながら顔だけが出るくらいまで扉を閉めなおし、体を風呂場に残したまま顔だけを動かし360度見回す

「あつた、やっぱり本命はべつか・・・」

そう言いながら近くにあつたバスタオルを隠しカメラを隠すように投げる

そうしてもう一度部屋を確認したあと、風呂場から出でくる。

そうして田の前に見えやすく置いてるビデオカメラを手に取りカセ

ツトを抜き取る。

そのあと、本来なら先ほどのビデオカメラを取る時、良いアングルでバックのセミヌードが取れるであろう隠しカメラを、さっさと投げたタオルで包む。

「このカメラは送信型か・・・」

映つたらその瞬間別の受信機からネットを経由して別の所に送られるだろう。

厳重にそのカメラを包んで縛つた。

「あとは・・・」

着替えを置いてあつた籠にはメイド服があつた

「次回作はメイド物か・・・」

そういうながらそれに着替えながら、腰を閉めるための布紐をはずす。

そうして廊下に繋がる扉の鍵を開ける。

「・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・

びつやから強行突入はないらしい

しかたないので、一センチだけ扉にスキマを作り

「彗星流1の章、震脚」

そう咳きながら強く左足を叩き付けた

そうして「キヤ」という声を聞く前に起した波を感知し

「見つけた。彗星流3の章、布槍術、大蛇」

そう言いながら先ほどの隙間から布紐を飛ばし母さん持つてたカメラをぐるぐる巻きにする。

そうして、やつと廊下に出ると落ち込んでいる母さんがいたので「

はあ～」と一つため息をつきながら。

「私がいる限りご主人様には指一本触れさせません!」

そう今もつ音声だけは送信できるカメラに届くよつて言つた。

製作スタッフの激励はコレでいいだろ、と思いながらパジャマに着替えるために部屋にさつさと戻る葵であつた。

第6話 BALDR MAID（バルド メイド）（後書き）

なんというか・・・微妙に意味がわからないような内容だな・・・。
・・・後々わかるように書いていけばいいのか、それとも□□で補
足説明いれたほうがいいのか・・・どちらだろ？。

第7話 ハンジカルセキュリティー 2009（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

第7話 ハンジェルセキュリティー 2009

「画面に右手を押し付けてください」
その機械的な言葉にしたがう様に右手を画面に押し付ける
それに反応するかのように画面の奥で光の棒が上から下へと動いた
あと

「氏名、役職を画面下のマイクにお答えください」

「AYUMI、プログラム総責任者」

「認証しました。どうぞお入りください」

その声に反応するようにガチャーンと鍵が開けられる
そんな厳重なセキュリティーが施されている部屋はとても小さく、

何とか一人は入れるか入れないかという大きさ。

そんな一室のほとんどは一台の大型パソコンが閉めている
そんな画面の前に座り

「社長お願いしますよ」

そう祈りながら彼女はまだ動きの無い画面を見つめるのであった

『プログラム総責任者』

他社においても最重要の役職と言える。

彼らがいなければ、どんなにいいストーリーでも小説になり、どんなにいい声を吹き込んでもドラマCDにしかならないであろう
そんなゲーム会社において最重要の役職だが脳内姉妹においては羨望、嫉妬、恨みを向けられ、また社内では一番なりたい役職とも言われてる（社長乙）

なぜか？それは・・・

「強硬手段できたか・・・また鍵付け替えないと」

そんな声がヘッドホンから聞こえてきて、祈る手に更なる力がこもるが

「あつた、やっぱり本命はべつか・・・」

そんな、 そう呟きながら机に倒れこむ（ただし画面からは目を離さない）

程なくして画面は布のような物が飛んできて暗くなり

「このカメラは送信型か・・・」

音声だけしか拾えなくなつてしまい

プログラム総責任者兼、水青あをいの（盗撮）映像編集の職に就く

AYUMIは肩を落すのであった

いきなりだが、

『脳内義姉妹に存在する天使について』

名は水青あをい、性別不詳の存在である

その天使は気まぐれにあるゲームの1作品にあらわれ、その作品を大ヒット作品に仕立て上げるが、その次の作品から現れることなく脳内義姉妹暗黒期に突入する

そして暗黒期最後の作品が完成。その呪われた作品は唯一赤字にならなかつた作品でもある（黒字にもならなかつたが）

そのため、その作品の続編を作ることに決まつたが、脳内義姉妹全体はその作品の呪いにつつまれ、社長は自宅で首を吊ろうとしたとき天使が再降臨したのであった

そしてその天使は会社にも現れ、社長と同じく首を吊りつとしていたプログラマーを止めたのであった

というのが脳内義姉妹（製作部門）に伝わる設定であった。

第7話 ハンジェルセキュリティー2009（後書き）

そろそろ色々な設定があるのに紹介できなくなつて説明を兼ねた話を作つてたら長くなつてきて、分けました。まだ続きます。

「水青あをいは何者か?」

と脳内義姉妹（製作部門）に質問すれば

「彼女は天使です」

と本気で答える人は5割いるだろう

のこり5割は

「天使のような存在です」

と答える

『天使、水青あをい光臨の真実』

それは、自分に自身の無くなつた社長が自分の居場所を求める家事の手伝いをしようと思い立ち、葵に止められないように葵が風呂に入つてゐる間に洗濯をしようとして、間違つて衣類、タオルの殆んどを洗濯機に詰めて回したとこ、白煙を上げて停止

洗濯もできない自分に嫌気が差してリビングで首を吊りつとした社長を、洗濯をまのがれていたベットシーツを巻いた姿の葵が止めたはいったという

そしてその姿をみた社長が有無を言わざずその姿のまま会社に連れて行き

「今回の作品にはこんな天使を出すのよ」

と言つたのが会社で首を吊ろうとしていたプログラマー、AYUMIが自分の目で見て、社長から聞いた話である

「あとは・・・」

「次回作はメイド物か・・・」

もうすでに映像（盗撮）を送る事のできず、声だけが届けられる画面を切り替え、扉を映し続ける少しゆれる映像に切り替える

「社長がんばつてください」

そう祈つていると「力チャリ」と扉の鍵が開かれる
だが扉は開かなかつた

鍵が開いたので突入すれば良いように思えるが葵は彗星流という無敵の流派の使い手で突入すればその姿を映し出す前にカメラを取り上げられてしまうだろう

葵の間合いの外から撮影するのがベストなのである
そうして待つていると扉が開き始めて

「彗星流1の章、震脚」

その声と同時に画面が揺れる、そして

「見つけた。彗星流3の章、布槍術、大蛇」

そんな声とともに飛んでくる布が映像を黒く塗りつぶしていった
万策尽きてしまったためそれまで一度も画面を見続けた視線をとうとう離してしまった

そんな落ち込んでいるAYUMIの耳に

「私がいる限りご主人様には指一本触れさせません!」

と、言う声が聞こえてバツッと視線を画面にもどす

そこには先ほどと同じく黒い画面が映し出されるだけだが、その映像の表示時間を巻き戻すと

「私がいる限りご主人様には指一本触れさせません!」
と先ほどの声が録音されていた

それと同時に部屋に備え付けられていた電話が鳴り

「AYUMIちゃんしつかり録音できた?」

「バツチリです、これから雑音を消してチェックしたあと社内放送
で流します」

「OKよ、ちなみにカメラを巻いていった布をよく見た?」

「え? なんだつたんですか?」

「メイド服の腰を閉めるための布紐よ

「わかりました、シナリオの方にはメイド服の布紐をつかつた布槍
術の戦闘のストーリーを書かせますね」

そう言いながら電話を切るのであつた

ちなみに何故彼女が一人で編集をしているのかと、プライバシー保護もあるが天使水青あをい（ ）を信じる社員のための配慮で、葵は映つてしまつた時はたまに自分が男である事を示すように上半身を見せ付けたりするのである

そんな映像をカットしたりモザイクかけたりとしなければいけないことがあつた為、AYUMIが一人編集するようになつたのであつた。

第8話 ハンジェルセキュリティー2010（後書き）

設定説明のお話終わり・・・アレ？

当初の予定では葵の容姿についての説明の話だつた気があるんですね
が・・・
どうしてこうなつた。

第9話 ハンジカルセキュリティー 2011（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

第9話 ハンジュルセキュリティー 2011

「俺も甘いな・・・」

そう呟きながら自分の部屋の鍵を開けて中に入る

そうして扉すぐ横にいる黒髪長髪のメイドをみて膝をつきたくなる

「洗面台のカガミをで大体わかつてたんだけね・・・」

だが、こちらは全身鏡。上半身だけでなく足まで映るようになつて
いる

そこに映る足は長く、脂肪どころか筋肉がどこにあるの?といつぐ
らいスラッと細長い

だが先ほどこの家に震度2ほどのおれを起したのもこの足で薔薇の
トゲといつより

波紋のない刀のような存在である

その足を包むのは、色の濃い白いストッキングでその10cm上ぐ
らいにあるのはマニのカート、パンツは見えそつだが見えないギリ
ギリのラインを保つていて

「どうか何でガーターまでつけやつかな・・・イヤイヤ、つけ
ないとストッキング落ちちゃうし」

ストッキングをはかないといつ選択肢を投げ捨てそう自分に言い聞
かせる

さらに視線を上げれば先ほど武器に使つた布紐がないため少しうつ
たりしているが元の形から細めに作つていて、もし布紐で絞つてい
たら細いといつよりくびれているという事がわかつたであつ

そして胸のあたりは控えめながらも少し膨れている

ちなみにコレはパツトで、それも服の生地の中に仕込まれていて服
を破かないと取り出せないものである

そんな体の横にしている腕は足と同じよう細い作りでその先につ
いている指なんかは細くて長く、少し開くだけでピアノの1オクタ
ープは簡単に押せるほどである

そして体より上に田を向ければ少々きつめで、どちらかといえば『かわいく幼いメイドさん』というより『厳しい若いメイド長』というかんじである

スツト通つた鼻に小さめの口、長い睫毛をはやしながら少し釣りついていて細い田がありそんな各パーツがシメントリーに子顔に配置されている

「というか力チューシャはつけなくてよかつたのでは・・・」

とはいえ腰位まで長い髪である、先ほどは戦闘覚悟の状態だったのでは邪魔にならないようにと理由でつけたが、彗星流には髪をつかつた攻防あり、髪が邪魔になるという体の動かしかたは絶対しない。ただ風呂上りのため艶口シがあり枝毛なんか存在しない髪は普段の状態でも十分な凶器だが、それに濡れている状態となれば重さも勢いも増しかなり凶悪になるのでやめたのである

そうして諦めたように鏡から視線をはずし着替えるのであった

ちなみにこの衣装は

製作 南さん
採寸 キヤンさん

である

生地代は『水青あをいを崇める会』の会費で賄つておりかなりの高級素材である

また採寸がキヤンさんなのは、南さんに任せると襲われそうになるためである

着替え終わりもう一度自分の姿をカガミで確認

ちなみに何故カガミがこんなところにあるかというと、以前寝ている間に着替えさせられ、それに気付かず部屋をでたところ、カメラで取られるということがあつたからである（部屋は電波を送受信できないように改築しているのでカメラをセッヂしたりはされない）そのため扉横に全身鏡を置いてあり壁にはめ込んでいる（動かせる

形の物だと少しづつ動かされて見えない位置に追いやられた事が
つた)

「・・・」

「・・・・・」

「・・・・・・・」

そんな過去を思い出すと少し気になり、引き出しに入ってるメジャーを取り出しカガミの横幅を測る

「・・・ 30cm 短くなってる」

今度取り替えないとと思いながら今日は疲れたので寝ることにした
葵であった。

第9話 ハンジェルセキュリティー 2011（後書き）

ずいぶん開いてしまってすみませんでした。

忙しかったんです、免許の更新が行けない位に（もつ一月無い。）

（）

結局もう一話追加で説明回にしました。

ま～次話からもある意味説明回になるのですが。

この話の更新とともに忙しい間に浮かんだ設定での短編？を正月の

間に書く予定

がんばります

第10話 通勤電車（前書き）

この物語はフィクションです。

登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。

また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。

ぜつ

たい真似をしないで下さい。

「ん、ん〜〜〜ん

葵の朝は早い

腕を伸ばしながらベットから起き上がり、買つてから一度も鳴った事のない時計の目覚まし機能のスイッチを切る

そういうパジャマから動きやすい格好に着替えるとカガミで姿を確認してそつと音を立てないように部屋をでて田舎地まで足音も立でないよう移動する

母さんを起さない為の配慮だが・・・耳元で「ワトリ」が鳴いても起きない人には無駄な配慮である。修行の一環としてやつてる比重が大きい

そうしてまだ朝日のはじてない庭に出て朝の修行をする

ちなみに今の時間は朝の4時である。葵の目覚めはだいたいこの時間である

彗星流の門下である葵は毎朝寝起きに修行をしている

内容としては型の練習と特殊な的当てである（的当てにこなつては今日は割愛する）

型の練習は基本理念の防衛とその他の1の章と、攻勢の2の章、3

の章の中から自分の主のスタイル（得物）の物をする

葵は体術基本の2の章半分くらいであり、だいたいそれを1時間ほどでこなす

型だけでも100以上はあるのに、短い時間であるが彗星流の基本は力ではなく早さなので、実力のある使い手は「コレくらいは基本である（ちなみに葵はがんばれば30分ほどで同じメニューをこなす）

それが終わると汗を流すためシャワーである

ちなみにこのシャワーが葵にとって一番休まる時間で、夜のお風呂

と違つて起きていない母さんに襲撃される事がなく、また隠しカメラなどは夜の時に貼付けてしまつ為である

その後、「ご飯支度（朝食だけでなく、お昼の弁当、差し入れのお菓子、手の込んだ夕食を作る時の下準備）の時間まで勉強をするのである

とこつても宿題などは出た日の日の昼休みや放課後、寝る前に終わらせるのでだいたいこの時間にやる勉強は予習復習が殆んどである

そつとしてこりあいを見て勉強を切り上げ、「ご飯支度をするのだが、その時に母さんを起すために部屋の前まで行く

そして扉を開けた後、戻つて料理をするのである

どんな轟音を鳴らしても起きない母さんを起すのは困難で、起きる前に近所迷惑になるのは田に見えているのである

そのため今わなき父さんの教え通り部屋の扉を開け朝食の匂いで起すのが一番である

一応、急いでる時は適度な刺激（攻撃）で起す事もある

そつとして起きてきた母さんと一緒に朝ごはんを食べるのがおよそ7時、その後食器洗いなど細かい事を済ませて学校に行く、それを毎朝やつている葵であった。

第10話 通勤電車（後書き）

遅くなりました 本当はこいつもの時間までに投稿する予定だったんですが・・・ それにしても短いですね、今回もう少し長くなるかなーと思ってたんですけどこれ以上ムリでした。 内容としては葵の基本的な田ごころの風景ですがこのまま何話かコレを続ける予定です。

第1-1話 通勤電車2（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

「フイツー・シュー！」

「そう言いながら俺の髪が引っ張られた

「はい、はい。ちょっと待つてください、今タモを用意します」

「そう言いながら

「彗星流1の章、龍鬚」

回りの動きを制限する。そして

「・・・会長、何で鮫なんか釣るんですか

「え？ そんな大物だつた？」

「鮫は鮫でも、コバンザメだけど」

「え～っと、ごめんなさい」

「釣り上げるの面倒なので紐で縛つて船尾にくくりますね

「お願い」

そんなことを言われながら動き辛いなかカバンから用意していた紐を出して

「彗星流3の章、布槍術、大蛇」

そうして獲物を完全に縛り上げた

「会長自ら、お疲れ様」

電車から降りて出口とは反対側で繋がってる企業ビルの中を歩きながら話する

「コレは迷える子羊の救済、もとい女性専用車実現のためです」

「とはいえ生徒派の代表自ら囮をしなくとも」

3大派閥の中では一番人数が多い派閥だというのに

「しかたないです、痴漢被害を明らかにするためちゃんと被害届けを出すと言つてもなかなか言い出しにくいことですし、救おうとする人たちを囮にする前にまず自分の身をささげるのが先にする事というものです。彼女が手伝つてくれると早いのですが・・・」

「今日は被害届け出せなかつたけどね。あと派閥が違つて色々面倒なのでその案はムリ」

「まさか彼が釣れるとはね、理事派代表の自覚はないのかしら」

「いや、あるからこそ強気に出で、力関係を強調したかったのかも？あのバ力息子のことだから、触りたかつただけかもしけませんが現在、3大派閥の中で一番強い勢力を持つ理事派だからこそこうやつて誇示するのだ

「最大勢力が動き出してるから焦つてるということもあるのでしょうが・・・」

「だな、という事で抜き打ち遅刻チェックの許可をお願いしたいんだが」

「珍しくこちら側に来ることだからそんな事だらうと思いましたが。許可などなくとも独断でできるといつに、わざわざ生徒派まで巻き込んでやううとは、悪魔ですね」

ある部屋の扉に手をかけながら言つ

「いいイカがつれたのだからそれでマグロを釣りたいと思つのは悪い事ではないと思うけどね」

「マグロを釣るならアジでつりたいですね。といふことで彼女に準備させて、私も参加しますので着替えなくていいですよ」

そう言つられて開けようとした扉から手を離す。ちなみにアジで釣る

と脂身は少ない閉まつたマグロが釣れるとか釣れないとか

「・・・ありがとう。でも教師派である副会長にやらせるなんて、そつちの方が悪魔かと」

今、3大派閥の中で力がない教師派である副会長はバ力息子と婚約関係にあつたりする。それほどの勢力なのに生徒派の総本山といえる生徒会の副会長になつてるのは、生徒派>理事派>教師派>生徒派の三竦みがあるからであり、むしろ教師派を通して理事派がバ力息子の婚約者が副会長になる事を生徒派が抑えられなかつたのが問題でもあるが

「悪魔なんて、異教徒である理事派から、私は迷えるユダヤの民、

副会長を救うために必要な事です」

「それ、どちらかというとカトリック寄りの発言では・・・」

ちなみに会長はプロテスタントで洗礼も受けてたりする

「でも3大派閥が揃いそつならいほうが逆にいいかも」

「がんばって、走ってきてくださいね」

そういうながら駅の出口に向かう

駅の出口から校舎まではグルッと山を半周しないとつけないのだが、駅と繋がっている企業ビルには校舎裏にある第2管理人室の地下に繋がる秘密の抜け穴があるのでエレベーターなど使うと10~20分くらいの近道であり、この存在を知るのは今学校では5名程度である

それを利用して会長は抜け打ち遅刻チェックに参加するのだ

会長と別れ副風紀委員の西華にメールで遅刻チェックの事を送り、

駅の出口を出る葵であった。

第1-1話 通勤電車2（後書き）

屋根の雪が落ちてきて埋まるといつ夢を見て起きたら実家の犬がベットに飛び乗つてきました。

両親が除雪の手伝いをしてくれたのでよつやく書く時間ができました。

そして除雪しながら考えた学校の設定、書き始めは普通の学校にする予定だったのに・・・葵には学校にも平穏は与えたいという事ですね。

第1-2話 通勤電車3（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

「ふふ、今日はおまけを音速のかなたにおこして見てみる」

まゝ真弓も怪我しないようにがんばれ」

自転車に乗つても肩より低い頭をなでながら言つ

手を払われてしまつた

「チチチチチ」

「私はネーニューやハーモニー...。」

AYUMIに仕込まれたその口調のまま言われても説得力がないつてもういい

「それ二
てものた

「それによれば、時間が危険だ

「うーん、アマタ

「アーティストは、アーティストではないんだよ。」

「そう声をかけると喫茶「F」の店先で掃除してたマスターが立てかけてたチェックカラーフラッグを引き抜き掲げた

「よい、スタート」

そんな事関係なく旗は下がられた

「行くにや、ストーム3力スタムEX!!」

「あれ、ライトニングシリーズは？」

走り出した電動自転車に遅れることなくついて行きながら聞く

「いやにゅ、ついてくるとば。あとハイテーングー3は週末」よ調
整ちゅうに爆発したにゅ」

それで予備のストームシリーズだったのか

「にやが、このストーム3カスタムEXをただのストームと思うにやかれ」

「そういえば」

「いつもはこのような会話できないのだが
「スピードでは劣りゆがグリップ力をたかめ、インを走れるようにな
したにや！」

速さを求め続けたライトニングシリーズでは曲がり続ける坂道をア
ウト「ースギリギリをいつも走っていたため、インを走り会話など
できないのであった

そんな会話をしながら、自転車を必死にこぐが疲れて倒れる者、顔
を真っ赤にしながら全力疾走する者、すでに諦めて歩いてる者を追
い抜き走り抜けていく一人であった

「お～い、大丈夫か後輩？」

すでに諦めてあるいてたので自転車の横で倒れてる者に声をかける

「先輩なんなんですかあの一人は」

「そもそも自転車にのつて走ろうつてのが間違いだな、傾斜きつい
せいで走った方が楽だからな」

「じゃーなんで、あの小さい方は自転車なんですか」

「アレは電動、電動自転車だよ」

「え！？ 良いんですか？」

「ダメに決まってるだろ？、彼女は科学部部長、実験もかねて走つ
てるだけだよ」

「実験だからって、ずるいじゃないですか」

「いや、そもそも彼女は遅刻にはならないよ、あの自転車は学校で
保管してて一度学校によつて、取りに行つてるからな」

「は～」

「そう、落ち込んでないで早く立つ、まだグレータイムの10分が
あるじゃないか」

「先輩言いにくいんですが、さつき友人からのメールで校門前で風
紀委員が並んでるって」

「え！」

「しかも副会長もいるとか

「・・・サボルかな」

「そっちの方が処罰重いですよ」

「諦めてつかまりに行くか

「はい」

ドナドナを頭に響かせながら学校に向かつ遅刻者たちであった。

第1-2話 通勤電車3（後書き）

作品の質がひどい事になつてゐる気がします・・・
そのうち余裕ができたら編集しなおします
編集といえば、ある問題に最近気付きました。
人気の出やすくするためのあるポジションのキャラを登場させる事
ができなくなつてしまつたことです。
どうしようか、また別の作品でも書いてそつちで作ろうつかとも思つ
てますが、そんな余裕ないんですね

第1-3話 通勤電車4（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

「貴方たち待ちなさい」

何事もなく校門を突破し教室に行こうとしたら呼び止められた

「副会長か・・・どうかした?」

面倒だなと思いながら振り返る

「どうして貴方たちはこんなギリギリの時間に来るのですか」

「ギリギリってことは間に合つてるんだから問題ないだろ」

「ギリギリもギリギリ、どうして葵さん、貴方はいつもその時間調度に滑り込むような形ではありますか、それに真弓さん、貴方は遅れて入ってきたのですから遅刻なんですよ」と、両方とも俺にむかって言つてきた

「シャー」

いつのまにか俺の後ろに隠れて威嚇してる猫がいた

誰かどうにかしてくれないかな・・・と思つてると

「ミヤーミヤー、そんなところで繩張り争いしてないでさつせと風紀委員の手伝つてよ~」

「西華さん私の名前は一之瀬 富士、そんな猫の鳴き声みたいに呼ばないでください」

「可愛くて良いあだ名だと思うんだがどな~」

「喧嘩を売つてるのですか?売つているのですね!いいでしょう教師派筆頭である私に喧嘩を売るなど良い度胸ですね、つてちょっと待ちなさい」

いい感じにヒートアップしてたのでスキみて逃げ出さうとしたら見つかってしまった

「まゆまゆ、そらそら、おはよ~。一人はさつせと教室行つていいよ。また後でね」

「西華さん~」

「いい、そらそらはそもそも遅刻してないんだし、まゆまゆは特別

外出許可を風紀委員の印鑑つきで、ちゃんと朝とつてあるの

「だからといって、そんな無我つてな措置！」

「そもそも、お姉さまが来てない今、私には全権を託されている。たかが教師派が4大勢力最大の無党派代表代理の私に口答えなんかしないの」

そういうながら腕を引っ張つて副会長を連れて行く東雲だった

『コレよりこの電車は回送と・・・』

「先輩、アレ！」

「ん、なんだ？爆弾でもあつたか？」

「いえ、アレですよ」

「あ、またか」

そこには「コイツ痴漢です」と書かれた細長い布で巻きつけられた人がいた

「モガモガモガ」

「ちょっと待つてください、今はすしますから」

「あ、待て待て。まずは説明からしないと」

「いえ、でも、説明つて」

「こいつらは、ほどくとたいてい話を聞かないからな。お前にもまだ話してなかつたし聞いておくんだぞ」

「は、はい」

「え、つとまでは、痴漢は現行犯が原則だから事情を聞いたりとか、警察引渡しとかない。それと逆に縛つた相手を訴えようとも考えない方がいいぞある国外の外交官は本国で国外追放されたとか、それに満員電車の中誰に、どうやって縛られたとかわからないだろ？」

「いわれてみれば・・・どうやつたんでしょうね」

「ま、人間業じゃないな。あとうちらはこの事で脅迫とかはしない。いいか新人、お前もそんな事を考えるなよ。前の駅長はマグロ漁船に乗つてたつて話しだ」

「わ、わかりました」

「じゃ～せどくね、もうこんな事にならないよつにやめる事だな」
やつしてやつとせじいてもらつたどこかのバカ息子だつた。

第13話 通勤電車4（後書き）

副風紀委員長の名前を西華に変更

4大勢力、3大派閥

生徒派 理事派 教師派をまとめて3大派閥と言いコレに無党派を
加えて4大勢力という。

第14話 チュアフル！（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

第14話 チュアフル！

「野乃香、何でここにいる？」

教室に着いたらひとの机に座っていた

「授業もよくサボったり、昼休みとかもたまにどこにいるかわから
ない葵を見つけるには朝ココで張り込んでるのが一番エンカウント
率高いからね」

「机に座る意味はないでしょう・・・」

「その方が目立つからー」

は〜つとため息をたきながら

「で？ 何か用？」

「なかなか顔を出さないマネージャーがいて、今日ここは来るよう
にと部員たちに説得するように頼まれた部長がここにいたりするの
だが」

「なるほど、でも基本的に忙しいので手伝い程度でって事でのマネ
ージャーだったよな」

「でもそろそろ一週間、部室が・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

「アハハハハハハハハ

「アハハハハハハハハ

「掃除しろよ！」

「私たちは体育会系だからムリ！」

「もう少し女性らしさを持つて！」

「じゃ、もうすぐHR始まるし後は放課後部室で

「あ、ちょ！」

そつ言い残してひとと自分の教室の戻つていった野乃香だった

「葵ちゃん、大丈夫？」

隣の席のから、こつもどり間延びした口調で話しかけてきた
「あ～大丈夫。マリアおはよ～、今日は早いな。あとちゃんと付けは
やめて」

「今日は～早くついて～守衛さんに～校門空けてもらつたの～」

「あ～うん遅刻しなくてよかつたね」

昼間で遅刻という記録を作つた事のある彼女はそれを考慮して早め
に出たのだろう

校舎から10分もかからない位置に家があるのだが・・・

「それにも～西華ちゃん～今日は～遅いね～」

「いや、校門のところにいるよ」

「あ～本当だ～。早くしないと～HR始まるのに～」

「いや、風紀委員の仕事だから」

「あ～西華ちゃん～風紀委員さんだつたね～」

マリアが納得していると、教室に先生が入ってきた。

第15話 必殺痴姦人（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

「まだこないのかな」

屋上から見えた校門に3人ほど人影がいた

は～つとため息をつきながら校門側とは反対の柵を飛び降りた

姦しの部屋

無党派の秘密の会議室といわれ、3人の学校で働く無党派が集まる部屋である

その部屋に許可なくはいる者はその部屋の中での記憶と重要な物を失うといわれ、チエリー・ボーイとあだ名で呼ばれていた男がそこに入り、30になるまでそのあだ名で呼ばれ続けたが、魔法使いになれなかつたと言う

そんな魔の巣窟の現代の住人は

りょうちやんこと学食の料理長をやつてる彼女は、体重が3桁に届くとか届かないとかと言われ、握力が80超えているとか。ちなみに食堂で一番人気の特製豚骨ラーメンは粗めに骨を砕くのが重要との事

そうちやんこと清掃員の班長をやつてている彼女は、体脂肪が60%越えてるとか言われ、彼女が知らない噂は噂じゃないとか。ちなみにいつだか情報協力を頼みに彼女に頭を下げていたのは総監と呼ばれる刑事だったの事

けいちゃんこと警備員の班長をやつてている彼女は、元柔道軽量級の代表で寿引退の後2児を出産したいまでは無差別級にしかでれないとか言われ、代表の頃は無差別級の選手を投げていたとか。ちなみに先日突っ込んできたトラックを横倒しにした時「ひっくり返せないとはなまつてゐるわね」と言つていたの事

飛び降りた下の部屋の窓から入ると3人の女性が待つていて

「どうですか？」

「ん、まだ来てなくてそれを待つてゐる3人が授業を受けてないからそれで教師たちが出るよう言つてゐるらしいわね」

「私たちのほうで来たらつかまえておくかい？」

「警備員が生徒捕まえるのはダメでしょう」

「今度特製豚骨頬みにきたら下剤でも混ぜよつかしら」

— あれば午後の授業に出れないぐらうで、じゃなくどんこま
じょう

「んんんーくら無党派の権限

らね～そうちゃん」(チワ)

「かといって私たちが職務と関係ないことで動くのも問題があるわ

「彼女が動かしてくれないかしらねーりょうちゃん」(モモ)

•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

「行つて来ます・・・」

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての才能をもつておかなければなりません。」

そして窓から屋上にむぐる葵であつた。

第1-6話 鏡月～迷心～（前書き）

この物語はフィクションです。
登場する団体、地域、人物などはすべて架空のものです。
また、犯罪などの非合法行為を推奨する作品ではありません。ぜつ
たい真似をしないで下さい。

第16話 鏡月～迷心～

「ん～ん、来ない」

「会長、西華さん、このまま授業に出ないのも問題です。そろそろ引き上げませんと」

「といつてもあのバカ息子は腐つても理事派、先生たちに引き継ぐのもね・・・」

「ま～もう少し待つてみましょ～。富古さん理事長の方に行つてきて連絡ついてないか確認してきてもらえる?」

「・・・わかりました。行つて来ます」

「ミヤーミヤー行つてらっしゃ～い」

「富古です！」

一喝したあと、理事長室に向かつて校舎に入つていった

「で、どうしましょ～か」

「そうね～、会長はそろそろ戻らないときつ～よね～私はまだ問題ないけど、一人じやあのバカ息子は止められないかと。たぶん「お前も授業出でないだろ」とかわめき散らして強行突破するかな～」

「ですね」

まだ来る気配のない通学路に田をやるのであった

「して?」

「はい、今叔父様にお願いをして教師派が一人が授業に出でないことに問題視させ西華さんはムリでしじうが、会長は次の授業に出なければ辛いでしじう」

「それで残つた代表代理には同じく授業に出でないことをうちの息子に指摘させながらきみの援護で突破するか」

「はい、何とかなるでしじう」

「は～、何であいはこんなに問題ばかり起すかな。やはり今度からはきみと一緒に登校させるべきか・・・」

「そうしたいですが、生徒会に身を置いているため、生徒会議で召集されると、会わせるのが困難です」

「そこは、生徒会顧問の権限で何とかすればいいのではないか」

「ですが風紀委員経由での会議は止められません」

「結局は風紀委員か、忌々しい小娘たちめ」

「よんだ?」

「! ! !

「西華さん? !

「どこだ! ?

「扉の前。ちょっと急いでるから」のまま聞くけど、さっきお姉さまから「行くか?」って連絡着たからまだ來るのに時間がかりそしたら交代してもらおうと思つけどどう?」

「・・・息子はもうすぐつくだろ?」

「そうですか? わかりした、私たちだけで大丈夫そうね。」富古さんは先にもどつてゐから「

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「こうなつたらあの小娘が出張つてくる前に校門をくぐらせるしかない君も急いで校門に戻りなさい

「はい!」

「ミヤーミヤーお帰り。そんなに急いでどうしたの?」

「ずいぶんと、白々しいですね。それと富古です!」

「えつと何かした?」

「先ほど理事長室に来て自分で言つたことも忘れたんですか?」

「? ? ? 何を行つてゐる西華さんはずっと私と一緒にいたわよ

「じゃ、誰ですか、貴方以外に風紀委員長の「行くか?」って伝言ができる人は」

「・・・・・・」

「・・・・・」

「あ～なるほど。//ヤー//ヤー騙されたのね」

「え？でもあの声は確かに貴方の」

「お姉さまよ、お姉さま。お姉さまは私の声真似ができるのよ～」

「彼女にそんな特技があったのね・・・」

「どうか風紀委員長って喋れただんですね・・・」

「ま、お姉さまが出てきて必要以上に波風立たせないでいたしてつてやさしけね～」

着替えるのが面倒だったからって理由かもと思いながらも、すいべ来るバカ息子にナに言おうか考える西華であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2285p/>

脳内義姉妹

2011年5月8日16時29分発行